

1840年代～マルクス、エンゲルスに関して

共産主義者同盟

革命的プロレタリアートの最初の国際的組織で、1847年夏、ロンドンでひらかれた革命的プロレタリア諸組織の代表者大会で創立された。その指導者はマルクスとエンゲルスで、彼らはこの同盟の委託で『共産党宣言』を書いた。1852年まで存続した。同盟の歴史については、エンゲルスの論文『共産主義者同盟の歴史』（選集、第二巻、427ページ以下）を見よ。

『新ライン新聞』

1848年6月1日から1849年5月19日までドイツのケルンで発行された。新聞の指導者はマルクスとエンゲルスで、マルクスが編集長であった。レーニンが論文『カール・マルクス』のなかで、この新聞をさして、「革命的プロレタリアートの機関紙としてこんにちにいたるまで最良のものであり、かつてその右に出るものはなかった」と言っている。

『フオルヴェルツ』（『前進』）

ドイツ社会民主党の日刊の中央機関紙。1867年にW・リープクネヒトその他を編集者として発刊された。エンゲルスは同紙の紙面で日和見主義のあらゆる現れと闘争した。エンゲルスの死後の九〇年代から、同紙は、ドイツ社会民主党と第二インターナショナルを支配するにいたった日和見主義の論文を、系統的に掲載するようになった。第一次世界大戦にさいしては社会排外主義の立場をとり、1917年のロシア革命後は反ソ宣伝に従事した。1933年までベルリンで発行されていた。 第25巻 事項訳注 P539

1871年にパリにおける蜂起の破綻が不可避なことを予見し、

パリのプロレタリアートに警告したマルクス

第10巻 事項訳注 P530

マルクスは、フランス＝プロイセン戦争におけるフランス軍の敗北と共和制の樹立にあたって、フランスの労働者階級に軽挙をいましめてつぎのように書いた。「敵がほとんどパリの城門をたたこうとしている現在の危局に新政府をたおそうと試みることは、絶望的な暴挙である……彼ら自身の階級を組織する仕事のために、共和制の自由があたえる諸便宜を冷静に、また断固として、利用せよ！」（『フランス＝プロイセン戦争についての国際労働者協会の第二宣言』選集、第11巻、284ページ）。それにもかかわらず、1871年3月にパリに革命がおこり、コンミュン政府が樹立されたとき、マルクスは断固としてコンミュンに味方し、パリ人の歴史的創意と自己犠牲心を、最大限の言葉でたたえ、パリ・コンミュンの教訓を深刻に、革命的、行動的に評価した。

エルフルト綱領

第 15 卷 事項訳注 P490

ドイツ社会民主党の 1981 年 10 月のエルフルト大会で採択された綱領。この綱領は、マルクスが労作『ゴータ綱領批判』で批判した、同党の 1875 年の「ゴータ綱領」にかわって、社会主義者取締法が廃止されて労働運動がさらに高揚した情勢のもとで新たに採択されたものである。この綱領の作成にあたって、エンゲルスはカウツキーにいろいろの指示をあたえ、はじめ出された執行部の草案（エンゲルスが、『エルフルト綱領草案批判』選集第 17 巻所収——で批判したもの）にかわって、カウツキーがべつに起案した草案が採択されることとなった。しかし、カウツキーの草案でも、エンゲルスの批判の中心点であった国家権力の問題——プロレタリアートの独裁の問題——では、エンゲルスの忠言が無視されたままでおわった。この綱領の全文は、マルクス＝エンゲルス『労働者党綱領問題』、（国民文庫、107～111 ページ）に付録としておさめられている。

『ノイエ・ツァイト』〔『新時代』〕

第 25 卷 事項訳注 P553

ドイツ社会民主党の機関誌。1883～1923 年までシュトゥットガルトで発行されていた。1885 年から 95 年のあいだにエンゲルスの若干の論文が同誌上に発表された。エンゲルスは同誌編集局にたいして、しばしば、マルクス主義からの後退をきびしく批判している。しかしエンゲルスの死後、前世紀（19 世紀——青山）の九〇年代後半から、同誌には修正主義の論文が系統的にのせられた。第一次大戦中、同誌は、カウツキー派の立場をとり、社会排外主義を支持した。